

### 使徒パウロの「甘辛ミックス」

(ピリピ四・一四～二三)

「爆買い」「トリプルスリー」そして「五郎丸(ポーズ)」。師走のお楽しみ、新語・流行語大賞に選ばれたことばである。これ程までには流行っていないが、あるところで非常によく使われていることばに「甘辛ミックス」がある。字面だけ見れば料理のことかと思いきや、実はコレ、ファッション誌のターム(用語)である。何でもガリー(女の子らしい)な「甘い」コーディネートにフライントジャケットやライダースジャケットのような「辛い」ものをコーディネートすることを指すらしい。成る程納得である。

閑話休題。今朝の個所は先週から続くピリピ教会の支援に対する使徒パウロの謝辞が書かれている個所であるが、この謝辞、一言で言えば絶妙の「甘辛」である。パウロはピリピ教会の「したこと」に対して心からの賛辞を現しつつ、「ささげる」ことに對しての誤解が起らないように、正しく指導をしているのである。以下、パウロの甘辛ミックスぶりを見、献金について理解を深めたい。

### 一、「甘口」のパウロ

一四節にはパウロの本心があらわれている。当時パウロは信仰のゆえに牢に入れられていた。またパウロの語るイエスの「福音」は既存のユダヤ教の枠組みを超えるものだったから、当時の人々には難解であり、時にはそれを誤解するものもいたようである。(参：ロペテロ三・一六)更にある意味「生粋」の使徒でないにも関わらず、大胆不敵に伝道・教化を続けるパウロには積極的な支持者だけでなく、彼を喜ばない人々もいたことがこの手紙からもうかがい知れる。(参：ピリピ一・一五以下) こうした状況下において自分の宣教の結実であるピリピ教会が自分の働きの物心両面におけるサポーターになってくれたということは彼にとって大きな喜びだった。この世で人間のすることには当然のことであるが「カネ」がついて回る。これは宣教活動においても全く同じだ。神が宣教の道具として選んだのは天使ではなく、私たち人間なのだから宣教を維持発展させるためには当然資金が必要だ。ピリピ教会の多くは市井の人々であり、パウロのようにローマ国内を縦横無尽に宣教することは出来なかつたろう。しかし彼らは祈りと金銭によってパウロを力づけ、伝道を支え、福音に与った。この連係プレー、絆こそ福音宣教の原動力なのだ。

### 二、「辛口」のパウロ

貧しさは時に人を謙遜にする。窮乏の最中にピリピ教会からの支援を受けたパウロは、自分の宣教活動を私物化せず、その喜びと悲しみを多くの支援者と共有することが出来た。これは素晴らしいことである。しかし一度「支援」と「被支援」の関係が出来ると、いつの間にかそれが「支配」「被支配」の関係にすり替わってしまうことがしばしばある。支援している方は「支援してやっているのに」と反りかえり、支援されている方は「ありがとう」がいつの間にかやら卑屈さを伴ったものにならかねない。パウロはそこを見逃さなかつた。だからこそパウロはピリピ教会に対して、自らが神の力によって常に満ち足りていることを語り(一一、一三節)、更に彼が本心に欲しいものは金銭的なサポートではなく、ピリピ教会に与えられる霊的祝福なのだと言っているのだ。だが考えてみるとこれは実に勇気の要ることだ。というのもこれは「これは先生のために」と差し出された献金袋を前にその場で「いや、これは神が喜ばれる、神に捧げられたものですね」と言い換えるのに等しいからだ。一つ間違えば好意を無にしたと思われかねない。だがパウロは取返してそうした。何故か。簡単である。それはこの「激辛」コメントによって、彼らに真の献金の意義に

ついて教えたかったからだ。畢竟献金はカンパではない。どこまで行っても神に捧げるもの。パウロはそう言いたかったのだ。

\* \* \*

「お前んとこのおやじは信徒の献金を貰って食べてるんや。いうたら乞食みたいなもんや。お前は乞食の子や、えらそうにすんな」と詰られたある牧師の娘。家に帰るなり悔しくて泣きじゃくる彼女に父親はこう言った。「家のお金は神様が教会を通してくださるのだよ。信者さんはお金を教会に捧げるのだから。だから献金というんだ。もし牧師の生活費のためであれば『カンパ』だ。神様に捧げたものは神様のもの。神様はまた教会に献金の使い方を委ねられている。だから牧師は教会からお金をもらうが、それは神様のお金をもらうのだ。」この理屈っぽい説明をした牧師こそ、若き日の榎本保郎牧師である。彼はこうも言う。「献金を教会のためとか牧師のためと云った考えで捧げているとすればそれは間違いです。献金はどこまで行っても神の恵みに対する私たちの応答のしるしです。」友よ、目の前の種々の必要を見て、「そのために」捧げるだけではなく、その先にいる神に感謝を捧げ、宣教の業に加わろう。そこに真の敬虔があるのだ。